H. Gottschewski　『協和』
2009 年 12 月 18 日

注：囲み文字で書かれた用語を理解し、試験で「この用語を説明しなさい」という様な問題が出て来た場合に答えられる様にして下さい！

Heinrich Christoph Koch, *Versuch einer Anleitung zur Komposition*
(12 月 11 日の続き)

§. 48.-55. 七の和音について
§. 48. 長短音階の第五度上にある七の和音、すなわち根音から長三度、純五度、短七度から構成される「音階の自然から起こる」いわゆる基礎七の和声 (Grundseptimenharmonie) の転回形（第一転回：五六の和音、第二転回：三四の和音、第三転回：二の和音)

§. 49. 三和音に本質的な三和音と偶発的な三和音があると同様に四和音にも本質的な基礎七の和声以外にそれを模範とした偶発的な七の和音がある。

§. 50.-52. 長短両音階に発生する偶発的な七の和音

§. 50. 短三度、減五度と短七度から構成される七の和音（長調音階の第七度上、短音階の第二度上と長第六度[1]上）とその転回形

§. 51. 短三度、純五度と短七度から構成される七の和音（長調音階の第二度上、第三度上と第六度上、短音階の主音上と第四度上）とその転回形

§. 52. 長三度、純五度と長七度から構成される七の和音（長調音階の主音上と第四度上、短音階の第三度上と短第六度上）とその転回形

§. 53. 短音階のみに発生する七の和音：短三度、減五度、減七度から構成される「減七[度]の和音」(長第七度上）とその転回形。短三度、純五度、長七度から構成される七の和音（まれに用いられ、その転回形は用いられない)。長三度、増五度、長七度から構成される七の和音（これもまれに用いられ、その転回形は用いられない)。

§. 54. イ短調とホ短調の混合（Vermischung）から次の二つの七の和音が発生する。長三度、減五度、短七度から構成される七の和音（その基本形は用いられず、第二転回形、すなわち三四の和音のみが用いられる)。減三度、減五度、減七度から構成される七の和音（基

[1] Große sechste Stufe, つまり短音階の第六度を半音上げて主音上長六度に位置するもの。

本形が用いられず、第一転回形、すなわち五六の和音のみが用いられる）

§. 56.-62. 九の和音について
§. 56. 七の和音が最初に発生した原理に倣って、長調の第三度、第六度、第七度上にある七の和音に、その根音がただ「共に響く音」であるために、その創造者である長三度下の「本来の根音」を加えることによって「九の和音」と呼ばれる五和音が生じる。

§. 57. 同様に短調の第六度、第七度上にある七の和音に三度下の本来の根音を加えて、九の和音が生じる。

§. 58. 四声で作曲する場合が多いので、九の和音の中の一つの構成音が省略される。

§. 59. この本質的な九の和音にならって、音階の他の位置に偶発的な九の和音が生じる。

§. 60.-61. 九の和音の様々な特徴、転回形（ほとんど用いられない）

§. 62. 「二度」と「九度」の違い。二度は七度の転回形で、下の音が「不協和する音」（dissonierender Ton）なので、その下の音が準備され、解決を必要とする。それに対して九の和音には九度が根音と三度に対して不協和し、従って上の音が準備され、解決されなければならない。

§. 63.-65. 十一の和音について
長調や短調の第二度は第五度上の三和音の五度として発生したので、第二度上の七の和音にその本来の根音とその三度を加えて、六つの音から構成される十一の和音が生じる。また、長調や短調の第五度が第一度と共に響く音でもあるので、第五度上の七の和音にも第一度と第三度を加えることができる。
この六つの音から構成される和音は多くの不協和音を含むのでそのまま使用できないが、一部の音を省略する事によって使う事ができるようになる。
十一の和音の発生から四度と十一度の違いも明らかになる。四度は五度の転回形（すなわち協和音程）。十一度は七度にその根音の下の五度を加えたもので、七度として準備と解決を求める不協和音である。

§. 66.-68. 十三の和音について
七の和音から十一の和音が発生すると同様に、九の和音から十三の和音が発生する。その場合の十三度は六度と違って不協和音程であり、準備と解決を求める。